



◆大相撲よもやま話◆

三月場所の記録あれこれ

大阪での三月場所開催は、昭和28年から始まった。開催中止となった平成23年と、新型コロナ禍で東京・両国国技館での開催となった令和3年を除く71回の本場所にまつわる優勝と三賞の記録をご紹介します。

まず、大阪開催での三月場所での優勝回数が多いのは白鵬の9回。通算優勝回数が史上最多45回の横綱は、大阪でも圧倒的な強さを発揮している。令和2年には、新型コロナ禍のため無観客で行われた場所を制している。

そのほか、優勝20回以上の力士が上位に名を連ねるなか、大阪での強さが際立つのが、朝潮(横綱)と北勝海。「大阪太郎」ともいわれた朝潮は5回中4回の優勝を大阪で成し遂げている。北勝海も8回の優勝のうち4回と多く、平成2年、巴戦で大関小錦と関脇霧島を破ったの優勝など、印象深いシーンも多い。

春場所での三賞受賞回数は安芸乃島の6回が最高。殊勲賞と敢闘賞がそれぞれ3回ずつで、平成4年には12勝3敗で優勝決定戦に進出し、敗れたものの殊勲賞と敢闘賞をダブル受賞している。現役では4回受賞した力士はいないが、高安と尊富士が3回受賞している。尊富士の3個は、令和6年に新入幕優勝を果たした際に三賞総なめを果たした際のもので、三月場所での三賞総なめはこの時のみだ。また、三賞それぞれの最多受賞力士は、殊勲賞が安芸乃島と魁皇の3回、敢闘賞が安芸乃島の3回、技能賞が鶴ヶ嶺の3回。

三月場所横綱昇進を決めたのは、昭和34年の朝潮と、平成26年の鶴竜の2人。今年は、一月場所で優勝した大関安青錦が3人目の横綱昇進を決めるかが注目される。



三月場所で優勝2回以上の力士

回数	力士名
9回	白鵬(45回)
5回	大鵬(32回)、北の湖(24回)
4回	朝潮(横綱、5回)、北勝海(8回)、朝青龍(25回)
3回	千代の富士(31回)
2回	栃錦(10回)、北の富士(10回)、輪島(14回) 曙(11回)、貴乃花(横綱、22回) 若乃花(勝、5回)、武蔵丸(12回)、鶴竜(6回)

()内は通算優勝回数

三月場所で三賞それぞれの最多受賞力士

三賞	力士名	回数
殊勲	安芸乃島、魁皇	3回
敢闘	安芸乃島	3回
技能	鶴ヶ嶺	3回

三月場所で横綱昇進を決めた力士

力士名	年
朝潮	昭和34年
鶴竜	平成26年



令和2年、異例の無観客場所となった三月場所で優勝を果たした白鵬



昭和33年、三月場所3連覇を達成した大関朝潮(のち横綱朝潮)。「大阪太郎」と呼ばれた



平成4年三月場所、殊勲賞と敢闘賞をダブル受賞した安芸乃島



平成26年三月場所で優勝し、場所後に横綱に昇進した鶴竜



紀文 ほぐして広がるかに風味
小田原市風祭一
電話(0465)214三

◆ 三月場所の優勝力士 ◆◆

人気大関貴ノ花、 悲願の初優勝に日本中が熱狂

昭和50年三月場所優勝 貴ノ花(東大関 13勝2敗)

昭和50年三月場所、優勝争いの本命は東横綱北の湖。一月場所、横綱昇進3場所目で初めて優勝を果たした21歳の青年横綱は、初日、西関脇黒姫山に不覚を取った後は、快調に連勝街道を突き進む。

西横綱輪島は初日から3連敗して途中休場し、新大関で期待された西大関魁傑も8日目までに3敗を喫する中、北の湖に食らいついたのが東大関貴ノ花だった。戦後の相撲黄金期「栃若時代」を栃錦とともに築いた横綱若乃花の弟として注目を浴びて入門し、細身ながら強靱な足腰を生かした粘り強い相撲と端正なマスクで「角界のプリンス」と呼ばれた貴ノ花は、昭和47年九月場所後に輪島と同時に大関昇進。貴輪時代到来が期待されたものの、輪島が優勝を重ねて横綱に駆け上がった一方で、貴ノ花は頸椎捻挫や肝機能障害などに苦しみ、まだ一度も賜盃を抱けずにいた。しかし、前年十一月場所から11勝、10勝と大関昇進後初の2場所連続二ヶタ勝利。一月場所十四日目には2敗で首位の北の湖と1差で対戦し、敗れたものの大熱戦を繰り広げていた。

そんな貴ノ花はこの場所、初日から3連勝発進。四日目に西前頭二枚目荒瀬の外掛けに屈したものの、五日目から再び白星を連ね、九日目に東前頭高見山を左内掛けで仕留めて早々に勝ち越し決定。十日目には苦手の黒姫山の押しをしつかりと受け止めて左上手出し投げで退け、この時点で北の湖と2人、1敗で首位に並ぶ展開となった。

初優勝への期待が日に日に高まり、場内が熱気に包まれる中、十一日目には東前頭七枚目豊山を下し投げで退け、十二日目には2敗で追う東前頭筆頭三重ノ海を寄り切り、十三日目にはこのところ4連敗していた魁傑との大関対決を上手出し投げで制し、十四日目には西前頭八枚目金城を寄り切つて13勝目。この後、結びで北の湖が魁傑の小手投げに2敗目を喫したため、貴ノ花が1敗の単独首位で千秋楽を迎えることとなった。

千秋楽の相手は1差で追う北の湖。勝てば優勝が決まる貴ノ花だったが、横綱の壁は厚く、左四つがっぷりに持ち込まれ、善戦むなしく上手投げで向正面に投げ飛ばされた。場内の大歓声は悲鳴へと変

わり、優勝の行方は両者の決定戦に持ち込まれた。

これで北の湖にはこのところ4連敗。決定戦も北の湖有利と思われたが、貴ノ花はしつかりと気持ち切り替えていた。「待った」3回の末に立ち合い、今度も両者十分の左四つ。しかし、本割のようにながっぷりではなく、貴ノ花が左下手を深く結び目のあたりでつかみ、右上手を浅くつかむ有利な体勢を築いた。北の湖の強引な右上手投げをこらえ、頭をつける。右前廻しを十分に引き付け、腰を落としてグイグイ前へ。ついに西土俵に寄り切つて初優勝を決めると、館内は大歓声に包まれた。

表彰式では、春日野理事長(元横綱栃錦)からの賜盃授与に続き、実兄で審判部副部長の二子山理事(元横綱若乃花)から優勝旗を授与されるシーンが感動を呼んだ。NHKテレビ中継の視聴率は当時最高となる50・6%に達し、まさしく日本列島を熱狂の渦に巻き込んだ初優勝だった。



悲願の初優勝を果たし、実兄の二子山審判副部長から優勝旗を授与される貴ノ花

この場所の熱戦が動画で楽しめる



日本相撲協会公式YouTubeチャンネルの「大相撲アーカイブ場所」で、昭和50年三月場所の動画を公開中。メンバーシップ登録(月額990円)すると視聴できます(初日は無料)。下のQRコードからアクセスしてください。



◆ 大相撲「モノ」語り ◆◆

吊り屋根

本場所の会場で天井から下げられた大きな吊り屋根は、大相撲の象徴ともいえ、観戦気分を盛り上げてくれる大切な存在だが、そもそも屋根は柱の上に乗るのが自然な姿。実際に、本場所でも以前は土俵の四隅に柱が立ち、その上に屋根が乗っていた。

しかし、戦後間もなく、蔵前国技館の建造を機に、当時の武蔵川理事長(元幕内出羽ノ花)が、柱は観戦の邪魔になるからなくそうと考えた。当初は、柱と一緒に屋根もなくす案だったが、青柱(春、青龍)、赤柱(夏、朱雀)、白柱(秋、白虎)、黒柱(冬、玄武)という各色の布を巻き、神事的意味も

もつ四本柱がなくなることへの反対意見も根強かった。そこで知恵を絞ったのが、天井から屋根を吊らし、四隅に各色の房を下げるという案。こうして昭和27年九月場所、蔵前仮設国技館に初めてお目見えした吊り屋根は大好評で、地方場所の会場や、昭和60年に開館した現在の両国国技館にも取入れられ、今に至っている。

なお、屋根の形状は、吊り屋根になった当初は、四角錐に近い、ごく簡素なものだったが、本場所にふさわしくないと意見から、四本柱の時代と同じ神明造りの立派な屋根となっている。



昭和28年三月場所での簡素な吊り屋根



現在の本場所での神明造りの吊り屋根



シーチキン®



※「シーチキン」「オイル不使用シーチキン」は、はごろもフーズ株式会社の登録商標です。

